



新園帖と序

山莊子深くこころこころ実を母を志す月彌く  
暁くたもま〜と〜る無の風程よ〜とく  
市街のま廓を越ゆる〜と〜るゆるゆる者六  
の川とれゆると流の梅を分利うた〜れ〜  
を解しよあ〜と〜る花の〜と〜るたよな〜と〜  
空のまま分た〜と〜るた〜と〜るんた〜と〜る  
吾友を分た〜と〜るた〜と〜るた〜と〜る  
と〜のまわ〜と〜る実の白く〜と〜る〜と〜る

ころろと大悟せんとして 女奴が四條へ  
 ちほした尾をうらまひり 杖持敵の想をうら  
 咽すくせん 嗚呼 善哉 彼う志のまうたと思ふ  
 として 岳のちく 且性あつて 輝く 輝く  
 うも 響ふに とも ねん 人 の 心 音 まで ちう  
 下流を ちと 志く しく せ 影 され 通ふ ちと 志 せ  
 集の とも ぬえ ちと 志 採く ちと 志 せ

夜中 映秋

兼 尾 善 英

兼 尾 之 俳 諧

蒼より 洲邊の ちやー 萩の花	蒼 虬
まき 竹 戸 子 ちく 初月	有 竹
野 網 子 ちよ 土 橋 を けり 地	杜 鰲
雇ひ 休る 鈴 鳴 ちよ 来る	築 風
坊 を れを 先の ちよ ちよ の 内	文 象
奏 進 口 遠 来 山 乃 ちよ ちよ 木	梅 通

わたしからを乃てと後水の紫栲 太老  
 ちいさきまのつを出入 雨象  
 隔くの埃も奇麗小拵まき  
 産 忌まうふ修験むくろ  
 竹の子も籠子後れい糸の勢り 素堂  
 六とく入栲のめらうき月 黄逸  
 上法を肩子舞うる同呂より 孤折  
 長糸のうらうらとて録寺 耽為

是か〜とふ〜乃礼と地実嶼 杜葉  
 人きく見もや笑ふほくせ 平山  
 驚きう〜わきとぬれる花の雨 栲價  
 今戸もまき〜怪ち〜れと 礪山  
 ま〜世直乃畑子あらく美の風 芋文  
 皆よを摺まてと詔状ま〜ぬ 可松  
 手中流か〜れつ〜と系庚約 栲谷  
 空き〜山〜ふ 玉乃投入 柳鯨

中ノ笛もはな古風を元都 美鹿  
 姫かきこのせこくく川舟 鳥於雄  
 つふふふふふふふふふ 豫海  
 四五万濤の松舟押あふ 赤眞  
 杖舟揺の〜〜〜近眉元 若雨  
 や〜〜〜を法果ちきり士 久之志  
 ふふふふふふふふふの月 霞柳  
 名もささ方〜ふ〜出代 赤文

中修舟何も仕つるぬ若子詠 南溪  
 ち〜〜も釣乃利ぬ合 かくち  
 口笛を鳴〜〜六の度〜 杜美  
 第一の先法を〜〜 八山美  
 裏住も四條通〜〜花〜 梅室  
 き〜〜苗ま〜〜教乃辨桂 梅井

夜子之秋八月  
 祇園梅尾子おみ〜真川

風交々暮るや常のそと<sup>大坂</sup> 一宵

他志ん<sup>と</sup>く松き<sup>く</sup> 椋の<sup>く</sup> 其山

はら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>消る<sup>も</sup>や<sup>く</sup>月の雲 祇白

珠の巢<sup>り</sup>う<sup>し</sup>く<sup>く</sup>物<sup>を</sup> 五録

處<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>庭<sup>よ</sup>過<sup>か</sup>る<sup>を</sup> 山蔭

稻<sup>ま</sup>き<sup>く</sup>起<sup>く</sup>火<sup>を</sup>焚<sup>く</sup> 知風

お<sup>や</sup>め<sup>を</sup>山<sup>の</sup>風<sup>を</sup> 雀年

苗<sup>さ</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>へ</sup>の<sup>き</sup>秋<sup>乃</sup>くれ 塚兄

つ<sup>め</sup>る<sup>む</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>あ</sup>も<sup>不</sup>茂<sup>く</sup> 雀交

く<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>河<sup>風</sup>流<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup> 席尺

新<sup>し</sup>た<sup>舟</sup>かり<sup>あ</sup>る<sup>ま</sup>月<sup>乃</sup>ふ<sup>ふ</sup> 椋年

あ<sup>ら</sup>際<sup>千</sup>枝<sup>先</sup>拵<sup>ふ</sup>や<sup>お</sup>美<sup>才</sup>か<sup>ま</sup> 榮秀

清<sup>降</sup>や<sup>お</sup>ら<sup>を</sup>ゆ<sup>く</sup> 乙鬱

森<sup>く</sup>居<sup>る</sup>も<sup>ゆ</sup>子<sup>丁</sup> 苔居

行<sup>交</sup>ま<sup>る</sup>と<sup>う</sup>く<sup>り</sup>や<sup>く</sup>の<sup>月</sup> 鼎左

ふを捉て籠まわく去ぬ牡丹哉 大坂

眉山

戸をまふ出く障やるやあきの月、

曇一

あくあけ月乃体ぬ月尺こぞ、

素屋

手むらうと戸をぬゆりふれ杖、

藤居

清竹のかきの浅きりつ乃水、

笛三

あ才子をやるあしとや繩手色、

嵐吹

素吐や糖鉄子灯のあるかきり、

粧山

鴨ちと枯竹吹く風の際、

佳峰

夕暮の風吹るをく江乃す美、

白雀女

舟の出る船くけぬと杖白和、

知流

のく菊乃垣を越きり今朝の雪、

月桂

入内を尻同子、くくくをやり免、

雨子

ふふふくくをくれと折きぬ木槿哉、

謗推

壁の画乃くくぬふ物や、露のい、

肝更

拾うくをくかきく嶺心木の葉奈、

方江

ふ子好く松松をくくく美の雨、

林替

今とふ声のささくも茶火の香 イタミ 曲阜

居場、うき植のあきく不詠より 山口 真子

松のやみ月と吹くおきけにきけ、 喜之雄

秋風や白雲あくるまはられち 三田 吾岐

石橋のさゆりたもく一蓮の花 スマ 西月

初月や相伝はるなりとやうりおけ 内 古流

押分る禪のささくも萩の香 内 如板

ふ乃砂を揺るめくわや角力な、 梅南

古井戸の尾のけしやくもりの毒、 移海

夢時く末のおちた立樹の糸、 有園

花のささくもくもくしあきけ、 其乙

自の夕は姿もくもく田のあき、 不二心

菽のうきもくもく白、新布、おあし 後 馨語

乃とまきしふもくもくや一草の尾の香 伏元 岳風

ふりかきしうきもくもく早のわかれ 丹波 有樵



つら〜た〜一樹め〜茶の中、  
 九華  
 人の居るわりと静さ有るを、  
 端角  
 荒崎や小石より静かしの庭、  
 裸候  
 扱れ扱子むしの静ある有るが、  
 竹居  
 せ〜ゆふ〜静か〜ゆるま静か、  
 松家女  
 朝の萩さるるに〜さるる〜、  
 花陸  
 野の〜静か〜静か〜暑哉、  
 南涯  
 よいお〜の〜静か〜静か〜の静、  
 馬足

朝新や〜静か〜静か〜本道  
舟右  
 近よれ〜静か〜田のわらわ、  
 西新  
 樹子風のほろ〜静か〜の月、  
ハ  
 霞村  
 波よま〜静か〜静か〜月々宵、  
 松歩  
 けい〜静か〜静か〜静か、  
 可大  
 せ〜静か〜静か〜静か、  
何波  
 静像  
 象内〜静か〜静か〜静か、  
 静泉

あふくくた本増ちそくまのあアハ

巧笑

おとくくの度りく遊ぬ此乃花

芳若

あふくくた本増ちそくまのあ

木鳥

花の戸やけしこ斗く強も堅

笑语

目わくくの外へ吹く花こま

釣月

桂並そ鏡や羽子の実けし笑路

吐風

雪ぬろくちそくまのあ

墨雨

下流や葛樹子かた月の暈

希原

夫の松やあけく乃れ風と吹

李重

半乃ぬくそくまのあ

若池

月代のくふあそありかり

紅菴

菖菰乃遊よるやうにさのり

羊谷

送り火やけしをかたや波サキ

茂権

江のきくそくまのあ

五菴

小舟味よる舟の女帯や喜のあ

今是

川もとらあそくまのあ

霞柳

次く火繩をねくるすしみ<sup>廿五</sup>年

梅塢

ゆ笑やれくれくき家<sup>の</sup>ころ

葵園

島の灯をおよみ更けをこけ

雪峰

ふらふら座のうらをほき

噴霞

啄木鳥のまき煙をや松の<sup>い</sup>ふ

映門

男連未れをくつをせり

菊園女

未ねをみんつま木や杖のそ

柴人

種々々々々れそふ勢<sup>の</sup>そ

葱推

あまらりめき美略のり米<sup>の</sup>ま

卯角

おちくふ風情のわらやうた<sup>の</sup>そ

芦舟

出でたれをさけしむる<sup>の</sup>そ

芦岬

あらしをさけしむる<sup>の</sup>そ

弓楯

あまらりめき美略のり米<sup>の</sup>ま

葵園

未ねふ嵐乃あまら<sup>の</sup>そ

魚雨

あまらりめき美略のり米<sup>の</sup>ま

帰去

あまらりめき美略のり米<sup>の</sup>ま

葱月

目福のしそ伐ゆ〜〜まゝの石 備中 素湊

南子せぬおとを未くた〜くま勢哉 蕨一

本傳か〜〜〜ひを中〜り他の上 平山

伝は樹の苔ち〜〜未る蕨の〜 安藝 雪頂

おの〜〜を〜一果年去の扱も〜 近江 鹿谷

根も〜〜は塔つむ様や様〜〜れ 楓下

志あ〜〜もの〜〜暑〜〜やむ〜〜意 蕨邊

か〜〜返〜〜刃〜〜折か〜〜〜檜の巻、 苔雨

長才お〜〜存あま〜〜〜斬存〜〜〜免 礪山

いちつ方や抗障〜〜やよのちり舟、 九翁

刃〜〜も眼の〜〜〜む崖〜〜その〜〜ら、 女岐

存〜〜を〜〜の〜〜くふ影お〜〜〜板〜〜を、 折壁

根元か〜〜戦て未るや〜〜〜竹、 寄字

むつ〜〜〜う語お親子や星 桑、 櫛又

下枝を揚枝子つ〜〜ふ萩元哉、 东菴

粉妻やあうくくわく素人網近江 華浮

あきくちや機へ糸杭子造り、 米友

当異き生糸や弓乃土接り、 糸

いちりまの碎てちあや波か、 為於雄

乃乃うらう鴨川越くくふの内、 草丈

草うらうを乾乃刃をさう葛の、 糸竹

磨斗ちうろ糸柱子のさちまふ、 麦洋

入刀をよ地子うらうくくらの糸、 可松

葉くくわよのよう成るよめい哉、 柳谷

むつりまめのかまのやあよ内、 方室

よ子ももる田へまらうおくか、 麻中

一変て二本刀くくく、 花骨

名地のちまき大ねつまや粉のを、 霞陵

口先てけり傍のを西陸、 貧玉

高飛子ゆ乃まつくく、 之廣

夕月のほくあかすくく、 叔外

もや誰の第一目あんでくさの杖近江 寛揚

片わきまよひのあつ芽の粉が、 鼠洞

夕暮を忍び給へるるむとを哉、 芦海

り遠ふ舟の中、むむしれど、 花雪

極端へのせきくさるる一葉を、 素心

老をくゆ来れ風やふふ苗が、 太令

用かいつく南望とたむむ初るるニテ 屯像

宵月切ふ輪、そらの交度、ふ、 三津里

の烟へ出る道をもとや船の籠子、 粟人

奇程の鳥乃うまうん折、ふ、 香菘

道やれと土もつるぬいさ伴 奏鹿

居跡アまく涼しき清う成りイセ 方江

はみ多れや考れ葉もりく押さ、 一画

刃付れハ人もた出ぬ、ふ、 竹外

志とあつて物よりのまゝのまゝ、 雀叟

夕月や枯くさしそよぐ所の聲イセの 洒亮

通く来て居るやさうはいい、 号三

長みしつあふもゆ情やそよぐ、 素元

枯芦や新田もらく人多う、 九穂

名月の子陸や雨乃ゆつあう、 茶園

木を越せそやそよ上や池の月、 梅暁

名月や礫辺を歩け松葉搔、 茶峯

やぬ曹の清しくまきそわをが、 梅癩

池尻子ゆよくあふ来つそまうふ、 園輝

凍む人んくまきみり舟や橋、 子遷

了貸て海末たのむ新海、 洪石

秋夜をのまやほれくけきぬ系、 照星

山鳥乃進んでちくけりみり哉、 夜白

木枯や雲向りこまる山の穴、 尔孝

折りく多しふまきや落しあ、 梅実

まこれ甲のうちりにまき雲の橋、 霞涯

川橋子横多しこけやまの力イセ 白老

漫板ふくくく居る木のむか、 米府

葉生葉ものひく枝を姿、うま、 布山

梅らまや嵐乃のろく夷 柳、 相一

先くく一葉後かゆくゆふ草、 江平

湯上りや灯とわひまその夕さく、 东亨

菊詠しはくや桔梗の二番花、 亨栗

碎くま奇ふや秋のゆき波の力、 三岳

くはの戸や花よまぬく新もは、 象亭

五月雨子燈火あやし杜の才、 探翁

夕風や交ふ万のちた樹の白を、 流芳

り燈子よる障あやし美の面、 於岐権

田植見と出くう急人よんれ危、 自溪

山茶むやつねあやまきおひま、 岐襟

嵐尾系下一面晴し花のいろ、 是誠

口切くゆりのあるやまくの巻、 省吾



離市やおさくく頃子見世際

尾張

沙路

ふ月やり終のうらふ風呂らら

西后

若およりて益ふとみちの池走哉

黄山

岨うちや日つこま萩子陰白白

桃香

新了交枝乃まらるや萩のをれ

李嶺

若たれハ樹子のみ吹く妻の内

市雪

掃やれハまらる居るや初陸

西后

菽入やくらしく通る丸のうら

思文

白留り子若乃子夜や柿お終

庭知

火のーや子女実はくくーれ哉

鴈居

まらるや若若いー様まらる

三江

待ららら一際くくまき粉川が

蓬陽

大陣をのれくーらむ其其其

芝石

摺垣を刃越子一柄此華こま

鳥津

種を刃せくまらるのいる居終

卓池

三河

青い樹子をれくらんくく夫の病三河

塞馬

一押子成くゆりや自乃萩

流芝

羽小おとのまゝいゝゝゝあるん哉

青可

わくれもろろ鶴走ふや岸邊畔

水竹

葉吟くく下戸もろり掛かたり

三岳

本巻やわろり一鳴く萩一上宿

蓬宇

まろろや中よも一樹咲いり美

完位

つく隣子ちく北入や夕くれ

秋水

島うつやらきたる居よさく白ひ

梅史

有明のおくうにありて夜さく

玉表

まろくくく送中子あり妻一花

雪斗

妻ぬふ竹の子出くりくらの増

石屏

傳一巻く葉山子ちくろ鶴遠江

冬家

換投子送之ちけく白傘系

為中

屋中く儒伴引ぬくあつせ森

貫知

見わくくのよみ病くく初拾

汝尺

まわし〜枝を下ろや梅の家遠江 西八

松のまろのよをけし〜のそけ落哉、 久良木

吹おくる風子おとほゆす来ぬ、 夷白

喚ふぬ木をさるるもの空や山ごとく、 青黄

鳴々せく梢うらりやほゆき後、 清阜

村雨や木乃るの燕乃起ありスルカ 見話

枝のま〜お遊へち〜ゆ毛むしり、 連山

火をツれ子二階ありれを時を、 景文

いとちみ子江戸 禁をき後〜花ささる 一具

陽実子木の招乃〜とれや美が、 碓嶺

かくれても幹子あがるや松の丸、 山外

黒猫のま〜、初巻れ首子鈴、 助宜

志んり〜や乃さけ中ふくされ哉、 若飛

くつろりと蓮池くちむ〜これ哉、 素操

群るや〜とち〜て二三羽美のを、 由誓

京の秋子しととさるし指の巻

江戸

風朗

森とくろくけやして打つ芝草哉

禾木

すうくほと枝のたけより烟の柗

抱儀

清うきもたけやゆるきの遠柳

了知

陣中子層のけしらぬ梅の内

子孫

大衆や夷菱もとうり笑む声

松竹

云傳をまきくうち休む礎こふ

氷瓶

有明もあまこと起く小松曳

惟州

籠一ッ梁子見出ぬ妻の面、史子

菜乃花やまゝぬ種まき在江戸一集り

常居

境内の多かりくわ茶ぶ江戸

杜有

鶴ちや碁盤突出け厨の村、逸閑

茶の花やつやからくく烟わし石外

夕くらのあまのくもりや秋の空天遊

麦蒔や入り子赤糸人の良、庚年

晨時の吹ありをまあま北山、得蕪

二階まきし世をのぶるう不め帰江戸 溪翁

七子の松子とやくとらうり 詭岳

海道の入るまきくつ乃やうき奈 去子

多鶴子と抄るあやとれり子 晨支

折てくく去しとおりつ梅春 祖白

入る程とむあふあらの茂奈 五株

とくふかやあやけりふふふとれ本 波岡

灯とらせ六一先多らぬつけの鴨 遅流

黒けくま隈りのけや一落の差、 禾葉

ゆきあつとれ羽子落きを立梅が、 岩元

折くも見し方のや二葉三元、 大梅

あおとふがしをれま一妻の刃越后 陸彦

との際み子を育てや梅越后 小洋

たてぬし一万二もありき三の入、 枕五

相一葉落くく一や二雲の上枕堂 風兮

道まゝのうらをいりてはるはる哉、 路蓬

白子先接うらうら<sup>か</sup> 柳江

情云をいりてはるはる<sup>か</sup> 柳壺

葺物や不<sup>か</sup>五合ちる<sup>か</sup> 子均

老いふ<sup>か</sup>そ<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>、そ<sup>か</sup>う<sup>か</sup>り<sup>か</sup> 布<sup>更</sup>符

庫裏、うらも出<sup>か</sup>る<sup>か</sup>赤<sup>か</sup>や<sup>か</sup>小<sup>か</sup>お<sup>か</sup> 三子畝

火あ<sup>か</sup>り<sup>か</sup>て<sup>か</sup>け<sup>か</sup>や<sup>か</sup>乃<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>る<sup>か</sup> 菟園

川の流<sup>か</sup>ふ<sup>か</sup>は<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>ふ<sup>か</sup> 出村の<sup>か</sup>ま<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>る<sup>か</sup> 晴中

松の内<sup>か</sup>う<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>く<sup>か</sup> 森を<sup>か</sup>も<sup>か</sup>む<sup>か</sup> 藤古

珊瑚<sup>か</sup>子<sup>か</sup>や<sup>か</sup>そ<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>く<sup>か</sup> 杖の<sup>か</sup>輝<sup>か</sup> 一芝

み<sup>か</sup>も<sup>か</sup>れ<sup>か</sup>て<sup>か</sup>も<sup>か</sup>お<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>け<sup>か</sup>し<sup>か</sup> 糸<sup>か</sup>す<sup>か</sup>き<sup>か</sup> 山川

物<sup>か</sup>う<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>く<sup>か</sup> 世<sup>か</sup>活<sup>か</sup>の<sup>か</sup>や<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>く<sup>か</sup> 友<sup>か</sup>の<sup>か</sup>う<sup>か</sup> 完和

五<sup>か</sup>天<sup>か</sup>より<sup>か</sup>言<sup>か</sup>い<sup>か</sup> 新<sup>か</sup>ろ<sup>か</sup>き<sup>か</sup> 花<sup>か</sup>世<sup>か</sup>が<sup>か</sup> 立女

陣<sup>か</sup>て<sup>か</sup>り<sup>か</sup>う<sup>か</sup>ら<sup>か</sup> 子<sup>か</sup>の<sup>か</sup>ま<sup>か</sup>ら<sup>か</sup> 竹<sup>か</sup>笛<sup>か</sup> 奈文

美<sup>か</sup>を<sup>か</sup>や<sup>か</sup>本<sup>か</sup>讀<sup>か</sup>く<sup>か</sup> とも<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>る<sup>か</sup> 風 手風

いさよふかよまきくくねく本の方か本

蒼虬

葉河をあつてめく多し移の系

犬塚

月節乃多子くくらり後の月

笈風

江をまふふくく小村のお月哉

芳英

松の林をく移書居くく頭のか

太老

来く人子名をねいさうの菊

斜月

鳴くく乃くゆくくくやちられ花

琬子

如り月乃移子くくくく火が

杜葵

ふ系子あやまらまきの蒼ぶ

杜鸞

うくくまの老鳴木のまや一舟

壽堂

川一灯のうくくせ交やまのく

かうら

小波進も小坂をありく初お葉

杜春

板の万子のくくく白ちやまのく

いし美

待膏の物言をちく移るな

九起

去るや砂うつくく美新堤

菊地

登帰て鳴やくくりほくま

岱年

秋の花吹出はや萩の毛ホ

梅價

いづらもや初冬の光乃消ぬら

金葉

もつ秋やはる戸唄くして人の来

折絲

木兔の樹子居すもや秋の丸

菱灯

実入田乃露れしたる旭を

表英

糸へ入くらくんる本橙哉

霞仙

常掃ぬ交りてもいそがし

芭蕉

雨近まむし乃舞り杜若

菊韻

帰るとくわふち系火や大文章

梅通

温多烟のほのこすくは秋

雨翠

雲よれのほて度るやあ仙花

孤折

あきふつれくはの秋や秋の暮

烏卵

休ませくあるや飯茶のあ車

楚夕

もつ雪とひふりあはるる糸が

兔丘

人拓くよをりかゝる萩の中

二樓

あきも手陰さつやまきまこれ

芥舎



たぐりなき松のまきしの梅江 芳あり

里も出くぬる千の時を好まぬ 美亭

春のせぬもれと濡ぬれ初付白 蒼々

おやたぐく小石よせまきとくぬの川 如蓮

わくしつゆ舟をりある暑哉 華生

志くれゆくあそくしきとりの鮑江 鳥谷

やね侍い猶乃戻るやいおける 枝内

風あくむ夕日のいろやあはく原江 梅壺

低いあそびさうりものやのら江戸 久さち

物起も花千おとく出雲 完植

自分もよし架を並にやちき江 一帯

有のり終つと久梅のふさぎ 榮和

とききぬきとく四隅のイセ 華一

三月の下や山根の川のり 唐裡 梅井

り濤の比處千おとく好の力 有節

初秋やまきつてを影を竹の影

有節

み増ま井戸をあゝる跡う致 草丈

烟者乃むと大なる月のゆそめく 節

中よくとひやあゝる 唐 白 丈

地氣の息もはひひきこまのうら 節

何変の儀もまゝ乃若何 丈

掌子小玉おひやくるゆり先 節

入院の夢まを万機も出ま 丈

福若さくつゝえのゆる来古線 節

冬まきしと菓種のよる長恩元 丈

沓整るうちに中るを好越く 節

幕のるからのうく地かゝる 丈

知己の考と月まよとくわり 節

まふも持病子遠くちる 丈

ちりかりと蠢ふのくぬ蒲葺屋 節

葉 下ん ちりり 利根の川舟 文  
つ づくと 花よ 負来り 柱 賣 節  
わ くれの 葉 下 後火 とき 歌 節  
虫 指乃 五 窓よ かしこ 魚の 骨 全  
葉 下ん を あく の 葉 下 と ちり 節  
壁 裾 を 下り くり 廻る あら 土 文  
地 非 非 葉 下 城の に よる 節  
葉 下ん ちりり 星 一ツ 牙の ちり 文

わ くれの 人の 肩 下り ちり つく 節  
つ づくと 花よ 負来り 柱 賣 節  
十 念の やく けし ける 煙の ちり 文  
い ちし 里 下り 葉 下 折ふ 山 万 節  
刻 わ くれ 田 植の ちり 此 圃 下 米 文  
つ づくと 魚 下り ちり ちり 寧 焼 節  
必 葉 下ん ちりり 葉 下 ちり 文

ちやけり烈乃諍をもくねる

節

尺常りて虫しゝあるおれ尾

文

急下りてをく来雨の降出虫

節

物月二蟿の飛こむ海苔場先

文

とろろ爆竹下吹するを墓

節

沝芳

私つち穂と刀をまく刈り尾の麦

雲雀くくあけ溝の、反くさ

有節

登市を物へ、五銭をきおりて

芳

冬りくへ、大樽の縁張

節

惟子も折ふをきき月のころ

芳

まゝ、板戸てふともみらせぬ鮎

節

ありとせく、身消費を角力すき

芳

例乃戸も透けハ重菱

節

首途を立仇下あくる初糸ま

芳

そゝら美下登の元と好し

節

割くも隙つく板乃あやま  
 茶毗交の書と云く未茶屋  
 くんみりと月うくく未藪の方  
 輝ぬうち子き込をきくる  
 出代を待も招もなこのあひ  
 返くも云とくめくる上 姿  
 銀差をうらめぬま毛の白  
 吐くも降る土生乃柄え  
 芳 節 芳 節 芳 節 芳 節

ほうくくと東風くゆるま蕨防壳  
 乃くうくとまねを嫁を出くまぬ  
 濁者をしあくゆきせる獲のあし  
 利とつけらぬそり乃入金  
 名のよけふ元の和者のをまね  
 人々やとをぬ云く乃うち  
 吹降千桐の廣葉のうめり  
 出くくもゆき子おらす榎の口  
 芳 節 芳 節 芳 節 芳 節

夢、うらぐ徳利提ゆく古傍半 節  
鞆乃炭のこくくわきん系 芳  
切估一のきん此、おろる物のこく 節  
もやほて来る鳥足世の幕 芳  
つらぐ居てまゝ塞、く火橋乃元 節  
法入府とくく風物とほりん 芳  
揺るいよ白の埋木の浮出とく 節  
羨もれとくまゝと平耶とまゝおほぬ 芳

男子の何處もせきく花ささり 節  
のちる目うらぐはらぐお籠子 芳

李 瘵

遠くうらぐ持て来る、おや其の山 李瘵  
引鴨ささるる缸乃 中ほや 有節  
内対子ろくくあふ男出かをりく 瘵  
尻よ小とくく磨り透るり 節  
まゝくぬ風乃信も為月夜 瘵

於テさく早乃難とるよし  
 建或るともや一交丁もあま  
 つ掃多きく遠家まはき  
 る代あもつおれおろり他  
 あや、ろり多きふのろく  
 裸灯のやまく押はく  
 末社の終をまき、ひく除  
 切米をよけ金よまきせく  
 節 痰 節 痰 節 痰 節

お宿さくろりの序まろ  
 油まころうつろりはま  
 桶登乃葬のりまふ出、  
 むくきまて内もわしね  
 燈を遠ふまき一のめ  
 温家の道も彼岸果れ  
 栞斤けく、まら乃は  
 法印のまきんろりたる  
 節 痰 節 痰 節 痰 節

成らぬと才と御う糸よ歌  
燭るよい姿いこくく故き哉  
智行うらふきぬ雨陣  
相燭も中流ふ来し海に流  
八情乃携り地朽ましぬ  
釣竿をたふめく入まる庇裏  
よく興つるし菜のあり処  
不存書の家流ちる月を  
節 燠 節 燠 節 燠 節 燠

秋竹そまゝ菽乃かき情り  
お恋く木小屋の流し菜の育  
燠るあつち人のあつたる  
夕暮のうらゝ紋白乃換交  
有居のわ来をまゝ生を  
情折も古風俗よ花の花の賣  
巨子おちの二度そあゝ美  
燠 節 燠 節 燠 節 燠



地志をのや秋らるるの竹の歌

方竹

志けりと襟乃まふ小落冷

有節

稻舟の荷言ゆるしく持さそ

竹

雨子てこれの袖ははる月

節

あさふ古靴おひくさるる

竹

もまや出書のはり雁引おと

節

戸障子も風ふとらるるそのぞ

竹

この子、桑子ま傍の猿智恵

節

ほむしのおこれハ歌なる若丸子

竹

わ、名もこゝおるはりまゆみ

節

やましく娘と親も世をわらう

竹

あふ子ちちくはむおのたの重

節

ゆふ入きと弦の芳好の体は

竹

橋と内乃子ここれおるそ

節

わさるやうきこか考の奏、為

竹

けもきほふ来陳乃長徳象 節  
 おのうらゆくある松一三寸とく 行  
 蚕をわやと糸新乃よくつり 節  
 舞をせをを例し〜とある傀儡師 今  
 身つ〜りまねを四ツの鏡うつ 行  
 又〜しやせふ後をもおもひこ 節  
 男亦出〜、金のはひ〜く 行  
 か〜風の廣袖は〜く吹き〜 節

海ま〜く〜ぬる巻乃流景 行  
 ふ春ふちの宇に辰をのせりや 節  
 大み〜も〜む〜の〜を〜を〜 行  
 支口のゆ〜く自由を獲あ〜る 節  
 ち〜く〜も〜れ〜何〜山伏の〜を 行  
 五白海も川子流ゆ〜く木舟の月 節  
 秋〜も〜わ〜る〜く〜よの膏茶 行  
 木兔子お〜る〜茶おつ〜り〜れ 節

糸菱——くよま長持の——  
 釘  
 割儀て竹を編みたる白草方  
 釘  
 被吹く——詰房のとも  
 釘  
 吹まのむ花を左右の丁遣格  
 釘  
 空うねく——きまのあつらの  
 釘

大障ふくまのふくしあまらるる  
 有節

ちうけふ極子ちうき紋の傍  
 節  
 おくも此袴のせをとり向時之  
 節  
 むく火を焚く、詠のくすくす  
 雄  
 油賣のちいさう銭敷出を丸めり  
 節  
 上法とちいさく風のちうき——  
 雄  
 精靈も鏡にちうきハ用も好く  
 節  
 あれをつるる店の総子成  
 雄  
 新かのをちうき——おとね古城下  
 節

後糖更  
 於岐雄

叔むとよほぬは乃を夢

権

次たさう葉のあはを吹返す

節

わさう小性と葉のおる葉

権

糸山の力乃々へらも終ひ金

節

こらに又のちふ小新まぬ

権

ちららりと種をけしつゝは

節

是くせあう人乃下終をく

権

帳巾のさきと分ぬたさう

節

午森むと志ぶりあをあは

権

障悩の自むよむせる雛仕存

全

連あしらく梓ほひこむ

節

清停止のうちと生海もひつる

権

涼む園商のそふくくろり

節

岬乃あとおとく言笑か

権

くさう火泥子かゝる艘葉

節

森々庚了務四五十程とさう

権

く~~~~あ~~~~箱の賽跡 節  
 未と未ても用ふハ~~~~ぬや若 権  
 出あのみ砂子、屋乃坊ちよ、 節  
 何~~~~秋の中 権  
 もそ~~~~雲の跡、むらさ 節  
 や~~~~一人抱ふ旅、をき 権  
 け~~~~せ、せ、勢のむき、皮 節  
 も~~~~これ木の燐、尾出突 権

春~~~~夏~~~~花 節  
 わ~~~~居~~~~櫓の 権  
 紙~~~~妻乃ち~~~~ 節

第風

松風の吹、~~~~やむ~~~~ 有節  
 炭か~~~~あ~~~~ 有節  
 肩~~~~ま~~~~ 梅室  
 居~~~~たの~~~~ 風

多の事よ世を知らくくこれ内  
手号ありまのあり措  
四隣へかく本る乃新誓古  
又とりまの菜のほろきる  
近きく忍れいなきや舟て乳  
とけおくくくくくくく  
祇園會も来るふのつく雨の音  
餘近くくはく井の中  
室 節 風 室 節 風 室 節

舞拂ふ足場丸右の二るもの  
清成乃おほききき乃中  
風吹を人の元もたら雛子も情  
ぬくま砂、玉もくん一のる  
さくありあり清くききぬく  
法、度、家、まの、新、情、ま、ま、ま  
室 節 風 室 節 風 室 節

右一折

有節

野吹りのうらよ進んで右の力

ふれ根くまへる畑の刈あき

行く梨子種のはげをね出しく

腰をかきぬえまへるかき 桶

満みさりの二水あけと又降り

まへりちかひて運入行船

舞なうは老をうらまへそけ

一

一

一

一

一

一

一

うまれく玉をおかき名くらふ

ともも鳥多てなごの仲万れ

集るるをそつともみ借出

よもれを先く仕あはせ去拂

菽乃ほろよを吹きさひ力

果静ちまへるこ坂と并利して

産をささけりち備る小産後

物ささけりちのせき磨むたのみ鶴

一

一

一

一

一

一

一

一

夕のよみ交へては湯よりさし  
 へつゝりて寺後つゝる朝のふ  
 り鞍人のくまむ 山 際 一 節  
 吞代も喜とまゝなる五文橋  
 仰向くつゝりて傳ふ 雨 どり 一 節  
 嚏をあらえく披け火打箱  
 床へを目下ゝるまゝしよき中 一 節  
 り海くゝて打さし足の若柳り 一 節

除ねも更け鉄持のねと 一 節  
 風をやゝゆる筑波のつんまりと 一 節  
 りるつゝりてかむ 暮 合 一 節  
 井のくろと癩病やをいそひか 一 節  
 延喜を祝ふ 煙の奏 初 一 節  
 あゝまゝと掃うちつのみぬを 一 節  
 面ぬきまゝと戻るをとり子 一 節  
 みるむく鏡のうつらを掛あし 一 節



近交の採と只を乃くや 節

人よりよみしん讀乃き紙 一

いしき連る葉の振うり 節

あちと代と長たうやめ葉華 一

も中持そたる妻乃入お 節

雨窓

夢し、名もをやわさるや杖の字

木ちくくく白千むふ力乃出 為谷

むつたうと盤子あくの推賣て 有節

山よ能わまよあの大しあき 葉

いすたうく葉をひくきのり葉り 谷

とけきく凍千第とふ節 節

わんうらよ彼岩糸乃透をあひ 葉

かくくくせのすくやゆめ嫁 谷

有切の池走まらく 傍 節

云傳わくくまをぬ借か 葉

月もあはれまゝさへ海走も押つまの 谷  
 流ち一階るまゝつね傳ふり 節  
 山也千招まゝかゝふ茶風呂 寮  
 入道まゝせをたゝゝ類へし 谷  
 膏くゝゝ寂を失ふ庵のやね 節  
 いりまゝゝ坂を下りゝゝその妻 寮  
 ちふ花よ換りまゝの道ゆゑ 谷  
 妻のいゝまゝ千つゝゝ 苗舟 節

妻のさちかゝく畑千つゝゝり 文寮  
 森千入響乃まゝゝ菽垣 有節  
 立ちまゝあ菜の枯葉より捨ゝく 寮  
 をゝゝ踏け稚の鞠かゝん 節  
 大身根小ゝゝゝる内法うそゝく 寮  
 すゝ、帷子のゝゝあよゝ、膏 節  
 麻壳を盆乃まゝゝゝに寄さゝる 寮

けりて孫乃菜をよくり  
 男のちりちり嵐のおろく成り  
 ようそくかたる櫓のこころ  
 清き障り氷室清き露のり  
 新わくかく孫乃もろ夢  
 借由舟のきうくせぬ  
 遊り起されておもき眼の  
 云傳々泣けあれも遠い  
 節 季 節 季 節 季 節

ちりそりけり小雛の小道 具 節  
 月花よみ白り流のあけけり 季 節  
 根はや谷中流鐘のまゝ 節  
 弁南もむらに入る木燭籠 今 節  
 つくく来てとくあふ 鶯 季  
 ちれ足さるるや引つる庭のちり 節  
 居合乃満ちるとちり 季  
 けりてけり白あふ内俊同士 節

魚尺世りのゆは乃むり  
 偏かゝる傘をくるとし  
 ふう来まゝく鳥絨を洗は  
 かゝる隣屋後の木やり声  
 ちろく吐き医者のお談  
 月交て筒紐ゆゑおどろ  
 仲傳かゝるくふむの  
 つまゝる程よ大根の貝刻て  
 琴 節 琴 節 琴 節 琴 節

志やうく張つてもたのむ  
 息子ふくしうく眞花を負せ  
 予等へる杉乃皮及敷  
 ちる系干温氣をまゝく  
 妻とむらゝのひるほ  
 琴 節 琴 節 琴 節

員外

山茶花や葉の木とまゝ  
 火赤 燗赤



涼のち小をみき梅の隅をそとく  
能くつらふ小鬼をふれり  
て海を渡るやまきりて  
あはれなるよあはれなるに  
出るもつらふ小をみき梅の隅  
こゝに身を置くもつらふ

天保六年子秋

藏六居月撰誌

